

中3国語 握手 練習問題

上野公園に古くからある西洋料理店へ、ルロイ修道士は時間どおりにやってきた。③桜の花はもうとうに散って、葉桜にはまだ間があつて、そのうえ動物園はお休みで、店の中は気の毒になるくらいすいている。いすから立って手を振って居所を知らせると、ルロイ修道士は、

「呼び出したりしてすみませんね。」

と達者な日本語で声をかけながらこつちへ寄つてきた。ルロイ修道士が日本の土を踏んだのは第二次大戦直前の昭和十五年の春、それからずっと日本暮らしだから、④彼の日本語には年季が入っている。

「今度故郷へ帰ることになりました。カナダの本部修道院で畑いじりでもしてのんびり暮らしましょう。さよならを言うために、こうして皆さんに会って回っているんですよ。しばらくでした。」

⑤ルロイ修道士は大きな手を差し出してきた。その手を見て思わず顔をしかめたのは、光ヶ丘天使園の子供たちの間でささやかれていた「天使の十戒」を頭に浮かべたせいである。中学三年の秋から高校を卒業するまでの三年半、私はルロイ修道士が園長を務める児童養護施設のやつかいになっていたが、そこにはいくつかの「べからず集」があつた。子供の考え出したものであるから、べつに大したべからず集ではなく、「朝のうちに弁当を使うべからず。」

（見つかる）と次の日の弁当がもらえなくなるから）、「朝晩の食事は静かに食うべからず。」（ルロイ先生は園児がにぎやかに食事をしているのを見るのが好きだから）、「洗濯場の手伝いは断るべからず。」（洗濯場主任のマイケル先生は気前がいいからきつとバターつきパンをくれるぞ）、といった式のむじやきな代物で、その中に「ルロイ先生とうっかり握手をすべからず。」（二、三日鉛筆が握れなくなつても知らないよ）、というのがあつたのを思い出して、それで少しばかり身がまえたのだ。この「天使の十戒」が更に私の記憶の底から、天使園に収容されたときの光景を引っぱり出した。

風呂敷包みを抱えて園長室に入つていった私をルロイ修道士は机こしに

ルロイ修道士が代表となつてかんとく官に、「日曜日は休ませてほしい。その埋め合わせは、他の曜日にきつとする。」と申し入れた。するとかんとく官は、「大日本帝国の七曜表は月火水木金金。この国には土曜も日曜もありやせんのだ。」と叱りつけ、見せしめにルロイ修道士の左の人さし指を木づちで思いきりたたき潰したのだ。だから氣をつける。ルロイ先生はいい人にはちがいないが、心の底では日本人を憎んでいる。いつかは爆発するぞ。……しかしルロイ先生はいつまでたつても優しくかつた。そればかりかルロイ先生は、戦勝国の白人であるにもかかわらず敗戦国の子供のために、泥だらけになつて野菜を作り鶏を育てている。これはどういうことだろう。

「この子供をちゃんと育ててから、アメリカのサーカスに売るんだ。だからこんな親切なんだぞ。あとでどつと元をとる気なんだ。」といううわさもたつたが、すぐたし消えになった。おひたしや汁の実になつた野菜が私たちの口に入るところを、あんなにうれしそうに眺めているルロイ先生を、ほんの少しでも疑つては罰があたる。みんながそう思い始めたからである。

「日本人は先生に対して、ずいぶんひどいことをしましたね。交換船の中止にしても国際法無視です。木づちで指をたたき潰すに至つては、もうなんと言つていいか。申しわけありません。」

ルロイ修道士はナイフを皿の上に置いてから、右の人さし指をびんと立てた。指の先は天井をさしてぶるぶる細かく震えている。また思い出した。ルロイ修道士は、「こら。」とか、「よく聞きなさい。」とか言うかわりに、右の人さし指をびんと立てるのが癖だつた。

「総理大臣のようなことを言つてはいけませんよ。だいたい日本人を代表してものを言つたりするのは傲慢です。それに、日本人とかカナダ人とかアメリカ人といったようなものがあると信じてはなりません。一人一人の人間がいる、それだけのことですから。」

「わかりました。」

私は右の親指をびんと立てた。これもルロイ修道士の癖で、彼は、「わかつた。」「よし。」「最高だ。」と言つかわりに右の親指をびんと立てる。そのことも思い出したのだ。

「おいしいですね、このオムレツは。」

⑥ルロイ修道士も右の親指を立てた。私はハテナと心の中で首をかしげた。

「ただいまからここがあなたの家です。もうなんの心配もいりませんよ。」と言つてくれたが、⑦彼の握力は万力よりも強く、しかも腕を勢よく上下させるものだから、こつちの肘が机の上に立ててあつた聖人伝にぶつかつて腕がしびれた。

だが、顔をしかめる必要はなかつた。それは実に穏やかな握手だつた。ルロイ修道士は病人の手でも握るようにそつと握手をした。それからこのケベック郊外の農場の五男坊は、東京で会つた、かつての収容児童たちのきんきょうを熱心に語り始めた。やがて注文した一品料理が運ばれてきた。ルロイ修道士の前にはブレインオムレツが置かれた。

「おいしそうですね。」

ルロイ修道士はオムレツの皿をのぞきこむようにしながら両のてのひらを擦り合わせる。だが、彼のてのひらはもうぎちぎちとは鳴らない。あの頃はよく鳴つたのに。園長でありながらルロイ修道士は訪問客との会見やデスクワークを避けていた。たいていは裏の畑や鶏舎にいて、子供たちの食料を作ることに精を出していた。そのために彼の手はいつも汚れており、てのひらはかしの板でも張つたように固かつた。そこであの頃のルロイ修道士の汚いてのひらは擦り合わせるたびにぎちぎちと鳴つたものだった。

「先生の左の人さし指は、あいかわらず不思議なかつこうをしていますね。」フォークを持つ手の人さし指がびんと伸びている。指の先の爪は潰れており、鼻くそを丸めたようなものがこびりついている。正常な爪はもう生えてこないのである。あの頃ルロイ修道士の奇妙な爪について天使園にはこんなうわさが流れていた。日本にやつてきて二年もしないうちに戦争が始まり、ルロイ修道士たちは横浜から出帆する最後の交換船でカナダに帰ることになつた。ところが日本側の都合で交換船は出帆中止になつてしまつたのである。そして連れていかれたところは丹沢の山の中。戦争が終わるまでルロイ修道士たちはここで荒れ地を開墾し、蜜柑と足柄茶を作らされた。そこまではいいのだが、カトリック者は日曜日の労働を戒律で禁じられているので、

おいしいと言う割にはルロイ修道士に食欲がない。ラグビーのボールを押し潰したようなかつこうのブレインオムレツは、空気を入れればそのままグラウンドに持ち出せそうである。ルロイ修道士はナイフとフォークを動かしているだけで、オムレツをちつとも口へ運んではいけないのだ。

「それよりも、私はあなたをぶつたりはしませんでしたか。あなたにひどいしうちをしませんでしたか。もし、していたなら、謝りたい。」

「一度だけ、ぶたれました。」

ルロイ修道士の、両手の人さし指をせわしく交差させ、打ちつけている姿がのうりに浮かぶ。これは危険信号だつた。この指の動きでルロイ修道士は、「おまえは悪い子だ。」とどなっているのだ。そして次にはきつと平手打ちが飛ぶ。ルロイ修道士の平手打ちは痛かつた。

「やはりぶちましたか。」

ルロイ修道士は悲しそうな表情になつてナブキンを折り畳む。食事はもうおしまいなのだろうか。

「でも、私たちはぶたれてあたりまえの、ひどいことをしてかしたんです。高校二年のクリスマスだつたと思いますが、無断で天使園を抜け出して東京へ行つてしまつたのです。」

翌朝、上野へ着いた。有楽町や浅草で映画と実演を見て回り、夜行列車で仙台に帰つた。そして待つていたのがルロイ修道士の平手打ちだつた。「あさつての朝、必ず戻ります。心配しないでください。捜さないでください。」という書き置きを園長室の壁に貼りつけておいたのだが。

「ルロイ先生は一月間、私たちに口をきいてくれませんでした。平手打ちよりこつちのほうがこたえましたよ。」

「そんなこともありましたがねえ。あのときの東京見物の費用はどうやってひねり出したんです。」

「それはあのととき白状しましたが……。」

「私は忘れてしまいました。もう一度教えてくれませんか。」

「準備に三か月はかかりました。先生からいただいた純毛の靴下だの、つなぎの下着だのを着ないでとつておき、駅前の闇市で売り払いました。鶏舎から鶏を五、六羽持ち出して焼き鳥屋に売つたりもしました。」

ルロイ修道士は改めて両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつける。

②ただしあの頃と違って、顔は笑っていた。

「先生はどこか悪いんですか。ちつとも召し上がりませんね。」

「少し疲れたのでしょうか。これから仙台の修道院でゆっくり休みます。カナダへたつ頃は、前のような大食らいに戻っていますよ。」

「だったらいいのですが……。」

「仕事はうまくいっていますか。」

「まあまあといったところです。」

「よろしい。」

ルロイ修道士は右の親指を立てた。

「仕事はうまくいかないときは、この言葉を思い出してください。『困難はぶんかつせよ。』焦ってはなりません。問題を細かく割って一つ一つ地道に片づけていくのです。ルロイのこの言葉を忘れないでください。」

「冗談じゃないぞ、と思った。③これでは遺言を聞くために会ったようなものではないか。そういえばさっきの握手もなんだか変だった。『それは実に穏やかな握手だった。ルロイ修道士は病人の手でも握るようにそつと握手をした。』というように感じたが、実はルロイ修道士が病人なのではないか。元團長はなにかの病にかかりこの世のいとまをいこうやってかつての園児を訪ねて歩いているのではないか。」

「日本でお暮らしになっていて、楽しかったことがあったとすれば、それはどんなことでしたか。」

先生は重い病氣にかかっているのでしょうか、そしてこれはお別れの儀式なのですね、ときこうとしたが、さすがにそれははばかられ、結局はへいぼんな質問をしてしまった。

「それはもうこうやっているときに決まっています。天使園で育った子供が世の中へ出て、一人前の働きをしているのを見るときがいつとう楽しい。なによりもううれしい。そうそう、あなたは上川くんを知っていますね。上川一雄くんですよ。」

もちろん知っている。ある春の朝、天使園の正門の前に捨てられていた子だ。捨て子は春になるとぐんと増える。陽氣がいいから発見されるまで長くかかって風邪をひくことはあるまいという母親たちの最後の愛情が春を選はせるのだ。捨て子はたいてい姓名がわからない。そこで中学生、高校生

わかりましたと答えるかわりに私は右の親指を立て、それから④ルロイ修道士の手をとって、しっかりと握った。それでも足りずに腕を上下に激しく振った。

「痛いですよ。」

ルロイ修道士は顔をしかめてみせた。

上野公園の葉桜が終わる頃、ルロイ修道士は仙台の修道院で亡くなった。まもなく一周忌である。私たちに会って回っていた頃のルロイ修道士は、身体中が悪い腫瘍の巣になっていたそう。葬式で⑤そのことを聞いたとき、私は知らぬまに、両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけていた。

井上ひさし「握手」

が知恵をしぼって姓名をつける。だから忘れるわけではないのである。

「あの子はいま市営バスの運転手をしています。それも天使園の前を通っている路線の運転手なのです。そこで月に一度か二度、駅から上川くんの運転するバスに乗り合わせることもあるのですが、そのときは楽しいですよ。まづ私が乗りますと、こんな合図をするんです。」

ルロイ修道士は右の親指をぴんと立てた。

「私の癖をからかっているんですね。そうして私に運転の腕前を見てもらいたいのでしょうか、バスをぶんぶんとはします。最後にバスを天使園の正門前に止めます。停留所じゃないのに止めてしまふんです。上川くんはいけない運転手です。けれども、そういうときが私にはいつとう楽しいですね。」

「いつとう悲しいときは……。」

「天使園で育った子が世の中に出て結婚しますね。子供が生まれます。ところがそのうちに夫婦の間がうまくいなくなる。別居します。離婚します。やがて子供が重荷になる。そこで天使園で育った子が自分の子を、またもや天使園へ預けるために長い坂をとぼとぼ上ってやってくる。それを見るときがいつとう悲しいですね。なにも父子二代で天使園に入ることはないんです。」

ルロイ修道士は壁の時計を見上げて、

「汽車が待っています。」

「言い、右の人さし指に中指をからめて掲げた。これは「幸運を祈る」、「しつかりおやり」という意味の、ルロイ修道士の指言葉だった。」

上野駅の中央改札口の前で思いきつてきいた。

「ルロイ先生、死ぬのは怖くありませんか。私は怖くてしかたがありませんが。」

かつて私たちがいたずらを見つけたときにしたように、⑥ルロイ修道士は少し赤くなつて頭をかいだ。

「天国へ行くのですから怖くはありませんよ。」

「天国か。本当に天国がありますか。」

「あると信じるほうが楽しいでしょうが。死ねば何もなかったむやみに寂しいところへ行くと思うよりも、にぎやかな天国へ行くと思うほうがよほど楽しい。そのためにこの何十年間、神様を信じてきたのです。」

(1)——線部①「桜の花はもうとうに散つて、葉桜にはまだ間があつて」とありますが、この季節を表す言葉を漢字二字で書きなさい。

(2)——線部②「日本語には年季が入っている」と同等の内容を表す部分を本文中から六字で探し、書き抜きなさい。

(3)——線部③「ルロイ修道士は大きな手を差し出してきた」とありますが、ルロイ修道士のこの行動をきっかけに述べられている場面の内容を、漢字二字で答えなさい。

(4)——線部④「彼の握力は万力よりも強く、しかもうでを勢いよく上下させる」とありますが、この時の握手には「わたし」に対するどのような気持ちがかもっていますか。適切なものをあとから選び、記号で答えなさい。

ア 自分の権力を示す気持ち イ 厳しくしつける気持ち
ウ 歓迎し励ます気持ち エ 心配と期待が入り混じった気持ち

(5)——線部⑤「日本人とかカナダ人とかアメリカ人といったようなものがある」と信じてはなりません。一人一人の人間がいる、それだけのことで「わたし」とありますが、この言葉に表れているルロイ修道士の「人間観」を、十字以内で簡潔に説明しなさい。

(6)——線部⑥「ルロイ修道士も右の親指を立てた」とありますが、オムレツを食べていないルロイ修道士が、「最高だ」というこの合図をした理由を十五字以内で説明しなさい。

(7)——線部⑦「ただしあの頃と違って、顔は笑っていた」とありますが、なぜルロイ修道士は、怒る意味の指言葉を使いながら笑ったのですか。その理由を説明しなさい。

(8)——線部⑧「これでは遺言を聞くために会ったようなものではないか」とありますが、わたしがこのように感じたルロイ修道士の言葉を本文中から一文で探し、書き抜きなさい。

(9)——線部⑨「ルロイ修道士は少し赤くなって頭をかいた」とありますが、ルロイ修道士はなぜこのような行動をとったのですか。その理由として適切なものをあとから選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」が死を恐れていることが分かり、どう答えていいか戸惑ったから。

イ 死を恐れていることを「わたし」に気づかれたと感じ、恥ずかしくなったから。

ウ 重い病気にかかっていることを「わたし」に気づかれたと感じ、憎らしくなったから。

エ 死期が近いことを「わたし」に気づかれたと思い、きまり悪さを感じたから。

(10)——線部⑩「ルロイ修道士の手をとって、しっかりと握った。それでも足りずに腕を上下に激しく振った」とありますが、このときのわたしの思いを言葉にするとしたら、どのような言葉をルロイ修道士にかけたと考えられますか。「わたし」が「ルロイ修道士」に話しかける口調で答えなさい。

(11)——線部⑪「そのこと」が示す内容を「こと。」につながるように本文中から探し、最初と最後の三字を書き抜きなさい。

(12)——線部⑫「わたしは知らぬ間に、両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけていた」とありますが、ここにはわたしの複雑な感情が現れています。自分ではどうすることもできず、満たされないいい思いを何と言いますか。五字で答えなさい。

(13) この小説全体を通して、ルロイ修道士はどのような人だと考えられますか。具体的なエピソードを一つ挙げ、ルロイ修道士の人柄について説明しなさい。